



QUESTION & ANSWER

初予定されていたプログラムから変更になりましたね？
演目はどのように決めていますか？

気まぐれに聞こえますが、「弾きたい気分」を重要視しています。勉強のためとか、苦手を克服するためにも様々な曲を練習しますが、リサイタルでは今この曲が弾きたい、これで表現したいと感じる曲を演奏プログラムに載せます。

本日の演目についてお聞かせください

リサイタルは完結する一つの物語だと思っています。何かしらの関連性、結びつきを考えます。今回は前半は「古典様式」、「フーガ」で一貫性を計っています。一方ではヨーロッパ伝統のブゾーニとアメリカ人作曲家の対比も面白いと思っています。後半に関してはベートーヴェンとリストは音楽的には対極にあるでしょう。しかし人間的な優しさ、寛大さ、型破りな行動が共通しているかと思えます。

ご自身はどんなピアニストですか？

自身を評価するのは難しいですね、お客様のコメントに委ねたいですが楽譜に残された作曲家の真意を汲み取って表現することを一番に思っています。

PROGRAM

J.S.Bach /F.Busoni

Organ Toccata C-Dur BWV 564

- I. Preludio
- II. Intermezzo
- III. Fugue

S.Barber

Piano Sonata op.26 es-moll

- I. Allegro energico
- II. Allegro vivace et leggiero
- III. Adagio mesto
- IV. Fuga. Allegro con spirito

==== pause =====

L.v.Beethoven

Sonata nr 30 op.109 E-dur

- I. Vivace, ma non troppo / Adagio espressivo
- II. Prestissimo
- III. Andante molto cantabile ed espressivo
Var.1 Molto espressivo Var.2 Leggieramente Var.3 Allegro vivace
Var.4 Un poco meno andante cio e un poco piu adagio come il tempo
Var.5 Allegro, ma non troppo Var.6 Tempo primo del tema

F.Liszt

Années de pèlerinage deuxième année "Italie"
"Après une lecture du Dante" S.161 Fantasia quasi sonata

J.S.BACH (1685~1750)

バッハが生きた時代の鍵盤楽器はクラヴィコードかチェンバロが主流で現在私たちが知っているグランドピアノは実存しなかった。音域も狭くフェルトのハンマーが弦を「叩く」ではなく「弾く(はじく)」で音を出す楽器。多くの作品がこれらの鍵盤楽器のために作曲された。バッハのもう一つの作曲軸になった楽器がオルガン。空気をパイプに入れて音を出すオルガンは入れ続けている間、音は減衰しない。どこまでも伸び続ける音、足鍵盤によって奏でる重厚な低音がオルガンの特徴である。

カントールとして教会で修行したバッハは優れたオルガニストでもあった。毎週新しいカンタータを作曲しては演奏するという仕事を繰り返し、総計300以上もの宗教歌曲を含む数多くのオルガン作品を残した。当時使われていたパイプオルガンは今でもLeipzigのトーマス教会に残っている。

FERRUCCIO BUSONI (1866~1924)

ブゾーニはイタリアとドイツのハーフ。作曲家、演奏家としても名をなしたが数多くのバッハの曲を演奏会用作品としてピアノ独奏用に編曲したことで現在は知られている。

SAMUEL BARBER (1910~1981)

アメリカ作曲家連盟から依頼され、1947年に作曲されたピアノソナタは初演当初から絶賛された。クラシック音楽の歴史が浅いアメリカでこれほど「本格的」な曲が誕生したことは世界中の人を驚かせ、またその完成度の高さは聴衆を魅了した。このソナタを世界的スタンダードレパートリーにしたのにはソ連から亡命しアメリカに移住していた伝説的ピアニスト、Vladimir Horowitzの存在も大きい。ホロヴィッツは合衆国の作曲家をプログラムに取り入れたい願望を示しており、「バーバーの小品”Excursions”を演奏していたが、ラージスケールの曲を望んでいた。結果完成には2年以上かかったが、バーバーもホロヴィッツほどの名ピアニストが演奏してくれるのであればと全力で作曲に取り掛かった。最終楽章はソナタのクライマックスでもありバッハを讃えるかのようなフーガ形式で書かれている。その楽章は20世紀最高の最高の出来と同僚からも高い評価を得た。

BEETHOVEN (1770~1827)

今年はいつてヴェン生誕250周年。偉大さを文章で表すのは極めて難しいが200年以上前に作曲された彼の音楽は未だ新しい。楽器の音域をめいっぱいを使い、ペダルが生み出す斬新な響きを追求し、音楽様式の規則に縛られることのない自由な発想と共に進化する情熱を持ち続けたベートーヴェン。

怒りっぽい性格の裏には愛情深い気持ちとユーモアと知性溢れる人間性が「真の音楽」を生み出した。幸せとは言えない幼児期、持病を抱えながらも音楽に救いを見つけた人生。

希望を導くような音楽が特に晩年の作品には感じられ、聴衆の心に波を打つ。象徴的な例が有名な交響曲第9番(作品125)かもしれない。

ベートーヴェンの音楽を一言で表すならそれは「希望」。

これほど「生きた」音楽は無いと私は感じる。

後期3大ソナタに属するソナタ第30番作品109。ピアニストとしても生涯弾き続けた曲の一つである。

LISZT (1811~1886)

ハンガリー生まれのフランツリストはピアノの歴史を変えた人物と言っても過言ではない。指が6本あると思われるほど超人的な技巧の持ち主で、「演奏家ピアニスト」という仕事が出来たのもリストが始めたからである。歴史上初めてコンサートツアーを行い、最初から最後まで一人で演奏しきる＝「リサイタル」という言葉も彼によって生まれた。演奏旅行でイタリアやスイス、スペインなどを訪れその際に受けた印象、読んだ本などを題材に曲を作ったピアノ曲集「巡礼の年」「ダンテを読んで」は同曲集2年目イタリアの中心作品である。13世紀に生きたDante Alighieriの長編大作「神曲」に登場する3つの世界「地獄、煉獄、天国」をソナタの楽章に割り当てるような構成からソナタ風幻想曲と呼ばれている。詩的要素、哲学も感じるリストの曲だが彼の曲はかっこよく美しいというのが適切な形容詞かもしれない。華やかな技巧は挑戦意欲を触発し奏でる快感を感じさせる。